
シンポジウム 1

前立腺癌におけるそもそまとまっとう

司 会	武 中	篤 (鳥取大)
	杉 元	幹 史 (香川大)
演 者	加 藤	琢 磨 (香川大)
	鑑 野	秀 一 (鹿児島大)
	三 浦	徳 宣 (愛媛大)
	森 實	修 一 (鳥取大)
	三 木	淳 (慈恵医大)

司会のことば

近年インターネットの普及によって、いつでも誰でも多くの情報が容易に入手できるようになっている。患者さんも病気に対して、正しいかどうかは別にして多くの知識を持つようになってきている。そういった意味では、われわれの診療は以前とは比べものにならないくらい多くの目にさらされ、評価されていると覚悟しなければならない。

そのような中、われわれは泌尿器科のプロとして“まっとう”に前立腺癌診療を行えているのだろうか？ふと我に返ると今まで日常的に当たり前やってきたことが案外当たり前ではないかもしれない、ということに気づかされることがある。今回はそれらの疑問に答えるべく、このシンポジウムを企画した。

大会初日、開会式直後のシンポジウムである。このシンポジウムの成功が今回の学会全体の勢いを決めるといっても過言ではない。とてつもない重責である。われわれはその期待に答えられたのか？

わが国の 2021 年の癌統計では、前立腺癌が男性癌の罹患数一位となっている。もはや前立腺癌は common disease といえる。今思い返すと 30 年ほど前は、前立腺癌治療といえばたまたま見つかった前立腺癌患者に対して手術で精巣を取るだけ。それがその当時の“まっとう”だった。その後、前立腺癌診療はめざましく発展してきた。ガイドラインの普及や知識の均てん化によって、診断から治療までシステム化されてきた。現在の前立腺癌

診療はもはやルーチン作業になっているといっても過言ではないだろう。全国どこでも、それほど大きく逸脱することのない治療が行われる環境になった。

しかし、今われわれが行っていることは本当に正しいのか？診断から薬物療法や手術療法まで当たり前のように行っていること、それらは本当に理にかなっているのか、今一度立ち止まって考える必要がある。

今回のシンポジウムでは次世代を担う若手の先生方に、前立腺癌診療におけるいくつかのテーマについての検証をお願いした。前立腺癌は“まっとう”に診断されているのか？適切に、つまり過不足なく見つけられているのかということについて香川大学の加藤琢磨先生が明確に解説し、推測した。鹿児島大学の鑑野秀一先生には、以前から「日本人はホルモンがよく効く」と当たり前のようにならされているが、それは“そもそも”本当かということを検証していただいた。前立腺癌の薬物療法の基本は去勢だが、それは“そもそも”半永久的に続けなくてはならないのかということについて、愛媛大学の三浦徳宣先生に決着をつけてもらったと思う。また以前は癌の治療といえば手術、という時代があった。前立腺癌においてもロボット手術が登場して、誰でもできる、みんなやりたい、という状況になっている。一方で、放射線治療器機および照射方法の進歩や治療計画の発展によって、限局性前立腺癌に対する放射線治療のアウトカムは飛躍的に向上した。こういった中でも手術をすることは“そもそも”“まっとう”なのか？ただやりたいからやっているだけではないのか？ということについて鳥取大学

の森實修一先生に公平に論じていただいた。また今議論となっていることのひとつに、リンパ節廓清がある。これは“そもそも”前立腺癌手術で必要か？必要ならどうするのが“まっとう”か，ということに対して，慈恵医大の三木 淳先生に現段階での結論を出してもらった。

当日は，会場も含めて活発な議論が展開された。それぞれのシンポジストの受け答えも素晴らしく，会場を十分に温められ，後につながったと思う。本シンポジウム全体を通して，われわれ泌尿器科医はバランスがよく，

正しい方向を向いているということを再確認出来たのではないかと感じた。

今回のシンポジウムは前立腺癌の日常診療を見直すきっかけになったはずである。これが新たな臨床的疑問を解決したいという動機付けになり，さらに今一度自分の頭で考えてみようという気持ちになれたのであれば幸いである。これこそ賀本会長が今学会のテーマを「そもそもとまっとうを考える」に設定した「しかけ」だろう。
